

平成30年度 第2回山梨県考古博物館協議会議事録

- 1 日 時 平成30年11月13日(火) 14:00～16:10
- 2 場 所 考古博物館(風土記の丘研修センター講堂)
- 3 出席者 (敬称略)
 - (委員) 井出薫子、笹本森雄、丹沢良治、中村京子、窪田陽子、石川博田代孝、長澤宏昌、堀内秀樹、一宮英生、渡邊富孝、桐原ひかる
 - (事務局) 萩原館長、一瀬副館長、高野次長、小林学芸課長、総務課員3名
柳沢学術文化財課総括課長補佐、白須企画担当課長補佐

4 会議次第

- (1) 開会
- (2) 委員紹介
- (3) 事務局職員紹介
- (4) 正副会長選出
- (5) 議事
- (6) その他
- (7) 閉会

5 会議に付した事案の件名

- (1) 平成30年度考古博物館経過・予定事業について
- (2) 考古博物館利用状況について
- (3) 委員提言に対する対応・検討状況について
- (4) その他

6 議事の概要

- (1) 平成30年度考古博物館経過・予定事業について

(委員) ワークショップは興味喚起に有効と考える。今後も続けてほしい。

館長講座をホームページなどに掲載して、誰でも見られるようにしてほしい。前回の協議会において事務局で検討中と聞いているが、重ねて要望する。

(委員) 今年度の県民の日イベント「JOMONまつり」のチラシについて。「狩猟体験」の、弓矢で鹿を狙う人と泣きながら逃げる鹿、という表現は縄文時代らしくないのでは。狩猟は獲物を傷つけるためではなく、解体し、食べ、全ての部位を使うために行う。縄文人は命の利用についてしっかり考えていたと思う。

(事務局) 親しみやすさを考え、デフォルメしたものを掲載している。事實は御指摘のとおりである。子供達が縄文人の生活について考えられるような工夫をしていきたい。

(委員) 命の尊さをどう表現していくか、というのは非常に重いテーマである。十分考えていってほしい。

(委員) 昨今、縄文をアートとして見る、という流れが海外から来ているようだ。縄文展を考古博物館と美術館で同時に行い、美術と考古学の両側面から評価することを検討してみては。

(委員) アートという面でも縄文をアピールし、身近に感じてもらう企画は重要と考える。

(事務局) 縄文土器の美の側面と、考古学的な側面を兼ね合わせながら展示することは有意義と考える。どちらかの面に偏りがちだが、縄文時代の生活が捉えられるよう、展示の工夫をしていく。

(委員) 北杜市の金生遺跡では、冬至の日、甲斐駒の頭に日が沈む様子が見られる。祭祀の場所とされている。何の祭祀なのか？そういったストーリーを作り上げていく必要があるのでは。近くに北杜市の郷土資料館や、谷戸城跡、発掘していない遺跡もある。点をつなげて面に出来たら良い。

(委員) 学問的な裏付けのもと、研究者とは違う視点で、ストーリー的なものを立ち上げることは出来ないか。これは、考古博物館などに突きつけられた命題のように思う。

(事務局) 日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」の協議会を、学術的な視点で、山梨と長野の自治体を中心に立ち上げたところである。今後、観光分野も含めさまざまな視点を組み入れ、地域の方が継続的に運営していく、という方向で進めていく予定。本日の意見も協議会にフィードバックする。

(委員) 文学館主催の文学賞のような、縄文ストーリー賞があっても良いのではと思った。興味を持って考えている人は沢山いるので、広くアイデアを求めてみては。

(委員) 「レキシ」というミュージシャンが縄文土器を取り上げた曲などを発表している。音楽を取り入れると、新たな層の目を引くことが出来るのでは。

(委員) 縄文王国山梨で開催している縄文フェスなどに、「レキシ」を呼ぶことが出来るの

では。

(委員) 現在ジビエが流行している。イベントに鹿を食べる体験を取り入れてみては。

(委員) 当ホテルのシェフが、鹿を一頭買い、骨まで利用している。鹿を無駄なく利用していた縄文時代を偲び、料理でコラボが出来るのでは。

(委員) 東京国立博物館の縄文展を、「美しい」と素直な気持ちで観覧した。導入として、アートという切り口があっても良いと思った。ミュージアムショップが賑わっていた。山梨にも多くのデザイナーがいるので、協同して売り物が出来たら良いと感じた。

(委員) 山梨県産業技術センターで、山梨県由来のデザインをアーカイブ化して、県内企業が使用できるようにしている、と聞いた。その中に縄文の模様もあるという。山梨にもすばらしいデザイナーが居るので、ここでないと買えない、というプレミアム感があるグッズが作れると良いのでは。ミュージアムショップは訴求力が高いと思う。

(委員) 東京国立博物館の縄文展で、山梨県立考古博物館所蔵の土器が置いてあったが、写真撮影禁止だった。山梨県立考古博物館であれば、同じ物の撮影が出来る。館内が撮影可能であることが伝わると、こちらに来たいという人が増えるのでは。

(委員) 夏休みスタンプラリーで、小学生に土器の絵を描いてもらってはどうか。縄文に興味を持つきっかけが大事だと考える。美術が好きな子どもや縄文好きな子どもが絵を通じて興味を持てるのではないか。

(委員) ものづくりの企画が、どれも単発である。本来ものづくりは1日では出来ない。年間の流れを意識した集大成の企画と、その発表の機会を設けてはどうか。

(2) 考古博物館利用状況について

(委員) 外国人利用者数のデータはあるのか。

(事務局) 見た目での判断ではあるが、今年の夏から概ねの人数を把握している。今後報告したいと考えている。

(委員) 外国人観光客は、低コストのバスで移動し、沢山のものを見たがる傾向があると聞いている。考古博物館前には高速バスと路線バスの駐車場がある。新宿や甲府駅からの、

バスによるアクセス案内を英語でホームページに掲載しては。

(事務局) 検討したい。

(委員) 友好姉妹都市である四川省には、三星堆という独特な形の仮面などが出土している古代中国の遺跡群がある。姉妹都市の繋がりによって日本に持ってくる事ができれば、インパクトがあり注目されるのでは。

(委員) 学校関係者の利用について。市川三郷町は静岡県の西伊豆町と姉妹都市を結んでいるが、伊豆には縄文の遺跡はあまりないと記憶している。市川三郷町の教育委員会に働きかけ、西伊豆町の小学生の来館につなげられたら、新たな観覧者が開拓できるのでは。

(委員) 考古博物館、曽根丘陵公園は子どもが利用しやすいよう作られていると思う。時間の都合で断念したが、当校でもクリーンセンターと県庁防災新館の中継地として、昼食時間に利用する計画を立てていた。このような利用が出来ることを学校関係者に紹介してはどうか。

(事務局) 学校関係の見学者について、県立博物館や美術館に比べ、小学校の割合が高いことが特徴。博物館のロケーション、史跡があることが好都合なのではと考えている。また、小学校は県内と県外が同数なので、県内の小学生にもっと来てもらえるよう考えていきたい。

(委員) 当校では、聴覚障害がある児童が学んでいる。授業は市が手話サポーターを付けているが、保険の関係で修学旅行等の校外への帯同は難しい。考古博物館で、県障害福祉課と連携し、依頼に応じて手話通訳やサポーターを付けてもらえると、より多くの方に利用してもらえるのでは。

(事務局) 手話通訳の派遣は現状では行っていないが、県障害福祉課と協議し検討していきたい。

(事務局) 今年度の特別展「古代アンデス文明展」について、入館者が目標の半分に達していない。当館では5年ごとに大規模な特別展を開催しており、アンデス関係は過去3回開催している。今回、「アンデスは以前見た」という反応が少なからずあった。外国の、普段は遠くて見られない場所を取り上げたいと考えているが、何か案があればお聞かせ願いたい。

(委員) 古代アンデス文明展について、ニーズが多様化されている現代において、2万5千人入館したのは大成功と考えている。今回これだけの人数が来た要因を考え、次回展開すれば良いのではないか。

(委員) 通訳案内士の資格を持っている。こちらの博物館で、展示物の研修を受けた通訳案内士がゲストのリクエストに応じて英語で解説できる、という仕組みを作ってはどうか。必要であれば知らせてほしい。

(委員) 昨今、博物館観覧の目的は多様化しており、教育や研究のほか、発信者として来る人達もいる。自撮りコンテストなど、宣伝したくなるような展示、レイアウトを取り入れることで、入館者数を増やす取り組みがあっても良いのでは。

(委員) 数年後の「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界文化遺産登録を見据え、今から東北の博物館と文化財を借りる交渉を始めておく方が良いのでは。

(事務局) 他県の博物館とは、お互いに収蔵品を貸借する中でネットワークを構築している。現在交渉を行っているものもあり、引き続き話をしていく。

(委員) 観光業界では、ブロガーを観光地に呼び、発信してもらう、という宣伝方法が使われている。考古博物館でも、ブログ、インスタグラム世代にモニターになってもらい意見を聞くことを考えてみては。

(委員) 現場に足を運ばないと体感できない巨大なものは、人を引きつける。考古博物館には、関東にはあまりない、巨大な古墳がある。これを上手く活用できたら良いと考える。青森の近代美術館と、隣の三内丸山遺跡に行ったが、外国人が多いのは遺跡より美術館で、奈良美智の力だと思った。現代美術の作家と組み合わせるのも、ひとつの集客方法かもしれない。

(委員) 考古博物館敷地内の古墳は整備されている。ぜひ活用を。

(事務局) 特に県外の小学生から古墳は好評を得ている。大きいものというと、奈良の大仏や鎌倉の大仏は外国人観光客が多いが、現状、当館の古墳に外国人観光客が多い、という状況は無い。外国人観光客が増えている昨今、何が外国人観光客を引きつけるのかを考え、対応する必要がある。

(3) 委員提言に対する対応・検討状況について

(委員) この資料くらいの活字の大きさを資料で作ってほしい。

(委員) 館長講座の録画が防災新館の生涯学習センターで見られるようになると良い。

(事務局) その方向で検討している。

(4) その他

(委員) 子どもと歴史の授業の復習をする際、教科書に書いてあることと、今の自分達とのつながりを説明したら、納得し、身近に感じてくれた様子だった。授業で勉強したものの実物が考古博物館で見られることが、もっと子どもや親に伝わると良いのではないかと。

(委員) 地域で土器作り教室などを開催しているが、参加者で考古博物館を観覧したことがある人が少なかった。今後も広めていく必要がある。

(委員) 博物館の共通のマークがある。外国人観光客が増えている中、表に出しておくとうわかりやすくなり、立ち寄ってもらえるのではないかと。

(委員) 子どもは歌や踊りにするとよく覚える。縄文の歌もあると良い。外国人の方にも興味を持ってもらえるのでは。考古博物館で縄文茶会をしたと聞いており、お茶をしている人たちは注目している。繰り返し開催してほしい。

(事務局) 講師から竪穴式住居の中で茶会を開催したい旨の申し出があったため話を受け、初めての試みだったため少人数で行った。このような取り組みも続けていきたい。

(委員) 通訳案内士として、外国人プロガー、ユーチューバ - に甲府市内を案内した。このような事業を行う場合、山梨県観光推進機構と連携すると良いのでは。

以 上